

追手門学院大学
心理学論集第34号抜刷
2026年3月31日発行

原 著

間接的要求の受諾・拒否に及ぼす聞き手の感覚処理感受性の影響
— 要求使用者に対する感情の媒介効果の検討 —

山本 美桜・増井 啓太
(追手門学院大学心理学部)

The influence of sensory processing sensitivity on acceptance or refusal of indirect requests: A mediating effect of emotions toward the requester

Mio Yamamoto, Keita Masui
(Faculty of Psychology, Otemon Gakuin University)

原 著

間接的要求の受諾・拒否に及ぼす聞き手の感覚処理感受性の影響 — 要求使用者に対する感情の媒介効果の検討 —

山本 美桜・増井 啓太

(追手門学院大学心理学部)

The influence of sensory processing sensitivity on acceptance or refusal of indirect requests: A mediating effect of emotions toward the requester

Mio Yamamoto, Keita Masui

(Faculty of Psychology, Otemon Gakuin University)

要約

本研究の目的は、間接的要求の受諾・拒否に及ぼす聞き手の感覚処理感受性（SPS）の影響を検討することであった。大学生121名を対象に、要求方略（直接的要求・間接的要求・丁寧な要求）を操作したシナリオを呈示し、受諾・拒否の可能性に加えて、要求使用者に対する感情や認知を測定した。その後、回答者はSPSを測定する質問紙に回答した。分析の結果、SPSの下位概念である「低感覚閾」因子の得点が高い人ほど、間接的要求や丁寧な要求の使用者に対してネガティブ感情を抱きやすく、その感情を介して要求を拒否する可能性が高いことが示された。要求方略の有用性における個人特性や情動反応の影響について議論された。

キーワード

間接的要求, 要求方略, 感覚処理感受性, 情動反応

日常生活において他者に依頼を行う際、話し手は必ずしも意図する内容を直接的に表現するとは限らない。時として、意図を婉曲的に表現する場合がある。たとえば、他者に飲み物を提供してほしいとき、「飲み物をください」と明示的に述べるのではなく、「喉が渴いたなあ」と発話することがある。このように発話の字義的な意味と話し手の意図が異なる要求を間接的要求（indirect request）とよぶ（Seale, 1975）。

間接的要求の使用理由については、従来、ポライトネス理論（Brown & Levinson, 1987）に基づく説明が試みられてきた。Brown & Levinson（1987）は、対人コミュニケーションにおいて、人には自分の行動を他者から制限されたくないという自律性の欲求が備わっていると仮定した。同時に、他者の自律性の欲求を侵害したくないという欲求を持つとも仮定

した。欲求は、聞き手の行動を操作する言語行為であるため、聞き手の自律性の欲求を侵害し得る行為とみなされる。ポライトネス理論によると、間接的要求は、要求意図を明示的に伝えないために聞き手への強制力が制限され、自律性の侵害を軽減できるとされる。一方で、ポライトネス理論では聞き手の自律性の侵害の程度と埋め合わせの程度とのバランスにも着目しており、自律性の侵害程度の低い場合に埋め合わせの程度の高い間接的要求を使用することは、かえって聞き手の自律性の侵害となってしまうため、間接的要求は使用されにくいと述べている。なお、Brown & Levinson（1987）は、相手との社会的距離、相手の地位、要求が相手にかかるコストの3つの変数が、聞き手の自律性を侵害する程度の認知に影響すると想定している。このようにボラ

イトネス理論に基づく、間接的欲求は聞き手への配慮という利他的な目標を達成するために使用されることが考えられる。しかし、その後の研究ではこれを否定する結果も報告されている。たとえば、平川他（2012）は、間接的要求の使用には他者に配慮する動機ではなく、むしろ利己的な動機が関与することを明らかにした。

間接的要求の使用動機に関する研究をもとに、近年では、間接的要求の有用性に関する知見が蓄積されている。平川・森永（2014）は、間接的要求、直接的要求、丁寧な要求の使用者に対する感情や認知、受諾ならびに明確な拒否の可能性を比較した。その結果、間接的要求使用者に対するネガティブ感情の程度は、直接的要求使用者に対するそれよりも低かった。同様の結果は、平川（2016）の研究においても報告されている。また、間接的要求を明確に拒否する可能性は、直接的要求の拒否可能性よりも低かった。一方で、ポジティブ感情や受諾可能性については丁寧な要求使用者に対する評価が最も高かった。これらの先行知見より、間接的要求が最も効果的な要求方略とは限らないことが示唆されている。

これまでの先行研究では、主に間接的要求の有用性に及ぼす社会的要因の影響が検討されてきた。例えば、平川（2016）は要求使用者と聞き手の社会的距離の違いが間接的要求の使用者に対する感情に及ぼす影響を検討し、その影響が限定的であることを報告した。しかしながら、間接的要求の有用性における聞き手側の要因の影響についてはほとんど着目されておらず、間接的要求の有用性に関する議論は限定的であった。とりわけ、聞き手の個人特性が間接的要求の受諾・拒否や要求使用者に対する感情や認知にどのような影響を与えるのかはほとんど明らかになっていない。そこで本研究では、聞き手の個人特性として感覚処理感受性（sensory processing sensitivity; SPS）に着目し、間接的要求の受諾・拒否、ならびに要求使用者に対する感情や認知、負債感の推測に与える影響を検討する。

SPSとは、脳内で感覚情報を処理する過程における生得的ないし器質的な個人差をさす（Aron & Aron, 1997）。Aron et al.（2012）は、SPSの高い人¹の特徴として、（1）情報を深く処理しやすいこと（Depth of processing）、（2）刺激に圧倒されやすいこと（Overstimulation）、（3）共感的および情動的な反応が強いこと（Emotional reactivity and high empathy）、（4）周囲のささいな変化に気づきやすいこと（Sensitivity to subtleties）を挙げている。

このようなSPSの特徴は、対人場面における心理的な反応にも影響を与えることが明らかとなっており、SPSの高い人ほど対人不安を抱えやすいこと（串崎, 2018）、対人場面におけるストレス反応が高いこと（飯村, 2016）、共感性が高いこと（鈴木・木野, 2008）が報告されている。加えて、先行研究ではSPSの高さと他者の感情への敏感さとの関連が指摘されている。例えば、Acevedo et al.（2014）は、SPSと他者感情の認知との関連をfMRIを用いた実験により検討した。実験では、恋人の「笑顔」、「悲しみ顔」、「中性顔」が提示され、それらを見ている際の脳活動を計測した。その結果、SPSの高い人ほど「中性顔」よりも、感情を含む「笑顔」、「悲しみ顔」を見ている時に注意や共感性に関わる脳領域が活性化していた。Jagiellowicz et al.（2011）の研究では、SPSの高い人はポジティブな感情を喚起する画像に対する情動価を高く評価し、それに対する反応も速いことを見出している。児童期の男女を対象とした調査では、SPSの高い児童ほど他者感情に敏感であったことが明らかとなっている（岐部・平野, 2020）。

本研究では、平川・森永（2014）や平川（2016）に倣い、直接的要求条件、間接的要求条件、丁寧な要求条件を設けた場面想定法を用いて各要求の受諾・拒否と聞き手のSPSとの関連ならびに、それらに及ぼす要求使用者に対する感情、認知ならびに負債感の推測の影響を検討する。先行研究で示されたSPSの特徴やSPSと他者の感情への敏感さとの関連を踏まえると、SPSの高い人ほど、とりわけ情報を深く処理し、ささいな変化に敏感である人ほど、間接的要求に含まれる字義的な意味と本来の意図との乖離や利己的な動機を隠そうとする要求使用者の意図に気づきやすいと予想される。その結果、違和感や不快感を抱きやすく、間接的要求者に対してネガティブな感情や認知を形成し、間接的要求を拒否しやすいと予想される。

方 法

対象者

大学生および社会人162名を対象にクアルトリクス社のWebアンケートフォームを用いたオンライン調査を実施した。全ての質問項目に回答していなかった41名を除いた121名（男性43名、女性77名、その他1名）を有効回答者とした。平均年齢は20.3歳で、年齢の標準偏差は1.90であった。

手続き

本研究は、架空シナリオを用いた前半パートと、参加者のSPSを測定する後半パートから構成されていた。本研究は2020年10月に実施された。

前半パートでは、平川・森永（2014）の研究で使われた引っ越しの手伝いを頼まれるシナリオを用いた。このシナリオを用いた理由は、大学生を対象とした先行研究（平川他, 2012）において、間接的要求を用いる場面として「労力の提供を要求する場面」が最も想起（66%）されたためであった。このシナリオでは、回答者の友人であるAさんが引っ越しをしようとする場面が記述されていた²。そして、Aさんの頼み方の記述を変えることで実験操作を行った。直接的な要求条件では、「来週の日曜日、引っ越し手伝ってよ」という要求内容をはっきりと伝える発話が呈示された。間接的な要求条件では、「来週の日曜日、引っ越しなんだけど人手が足りないんだ」という要求内容を含まない表現の発話が呈示された。丁寧な要求条件では、「来週の日曜日、引っ越し手伝ってもらえると助かるなあ」という要求内容を含むが直接的な要求条件より間接的な表現の発話が呈示された。なお、1人の回答者には頼まれ方の異なる3つのシナリオを呈示し、3つのシナリオの呈示順はカウンターバランスをとった。

回答者はシナリオを読んだ後、要求使用者（Aさん）に対する感情や要求の受諾・拒否可能性、使用者に対する認知ならびに負債感の推測についての質問に回答した。用いた質問項目は平川・森永（2014）の研究で使われたものと同じであり、ポジティブ感情、ネガティブ感情、受諾可能性、明確拒否可能性、要求使用者への印象、要求使用者が抱えている申し訳なさについての認知をそれぞれ測定する内容であった。

ポジティブ感情の測定は「良い気分」「配慮された」の2項目で行った。ネガティブ感情の測定は「不快」「面倒くささ」「強制された」の3項目で行った。ポジティブ／ネガティブ感情の項目は7段階（1. 全く感じなかった－7. 非常に感じた）で測定した。受諾可能性の測定は「頼みごとを引き受ける可能性はどの程度ありますか」という項目を用いて、7段階（1. 全くない－7. 非常にある）で測定した。明確拒否可能性の測定は「頼みごとをはっきり断る可能性はどの程度ありますか」という項目を用いて、7段階（1. 全くない－7. 非常にある）で測定した。要求使用者への印象の測定は「どの程度感じが良いと感じましたか」「どの程度信

頼できると感じましたか」「どの程度利他的であると感じましたか」「どの程度親しみやすいと感じましたか」の4項目で行い、7段階（1. 全く感じなかった－7. 非常に感じた）で測定した。要求使用者が抱えている申し訳なさについての認知の測定は「Aさんはあなたに頼みごとをすることに対して、申し訳なさをどの程度感じていると思いますか」という項目を用いて、7段階（1. 全く感じていないと思う－7. 非常に感じていると思う）で測定した。

SPSの測定

後半パートでは回答者のSPSの程度を測定した。そのため、高橋（2016）によって作成された日本語版Highly Sensitive Person Scale（HSPS-J19）を使用した。HSPS-J19は19項目から構成された尺度で、「1：まったくあてはまらない」から「7：非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。本尺度には、大きな音で不快になるなど感覚刺激の閾値の低さを測定する項目が含まれる「低感覚閾」因子、ちょっとした刺激への反応のしやすさを測定する項目からなる「易興奮性」因子、芸術に心を動かされる程度を測定する項目からなる「美的感受性」因子の3つの下位因子が含まれていた。

結 果

本研究の分析には統計分析ソフトHAD（清水, 2016）Version 18.00を用いた。

まず、前半パートでの測定変数とHSPS-J19の平均値、標準偏差ならびに信頼性係数を算出した（Table 1）。

HSPS-J19の α 係数に関して、19項目の α 係数は.86であったが、項目17「自分に対して誠実ですか」と項目19「豊かな内面生活を送っていますか」において主成分負荷量の符号が負であった。そこでこれらの項目を削除し、再度 α 係数を算出した。その結果、削除前よりも内的一貫性の上昇が確認された（ $\alpha = .88$ ）。そのため、本研究では17項目の合計点をSPSの得点として分析に用いた。

続いて、各要求使用者に対する印象や認知、要求の受諾可能性、明確拒否可能性、負債感の推測の各平均値について、条件を要因とした1要因参加者内分散分析を実施した。その結果、ネガティブ感情において条件の主効果が有意であった（ $F(2, 240) = 13.83, p < .001$ ）。多重比較の結果、直接的な要求使用者に対するネガティブ感情は、間接的な要求や丁寧な要

Table 1

要求使用者に対する感情、認知およびSPS得点の平均値、
標準偏差ならびに信頼性係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
直接的要求_ポジティブ感情	3.93	1.14	.66
間接的要求_ポジティブ感情	4.06	1.22	.63
丁寧な要求_ポジティブ感情	4.07	1.20	.66
直接的要求_ネガティブ感情	4.93	1.44	.86
間接的要求_ネガティブ感情	4.22	1.59	.86
丁寧な要求_ネガティブ感情	4.20	1.62	.87
直接的要求_受諾可能性	2.28	0.93	—
間接的要求_受諾可能性	2.87	1.24	—
丁寧な要求_受諾可能性	2.94	1.39	—
直接的要求_明確拒否可能性	4.60	1.55	—
間接的要求_明確拒否可能性	4.17	1.63	—
丁寧な要求_明確拒否可能性	4.23	1.66	—
直接的要求_印象	3.65	0.87	.69
間接的要求_印象	3.73	1.01	.74
丁寧な要求_印象	3.80	1.02	.78
直接的要求_申し訳なさ認知	3.64	1.23	—
間接的要求_申し訳なさ認知	3.71	1.57	—
丁寧な要求_申し訳なさ認知	3.85	1.57	—
SPS	3.11	0.90	.88
低感覚閾	3.11	1.15	.85
易興奮性	3.14	0.94	.77
美的感受性	3.02	1.35	.73

求使用者に対するそれらよりも有意に高かった ($ps < .001$)。また、受諾可能性においても条件の主効果が有意であり ($F(2, 240) = 17.45, p < .001$)、多重比較の結果、直接的要求使用者に対する受諾可能性は、間接的要求や丁寧な要求使用者に対するそれらよりも有意に低かった ($ps < .001$)。加えて、明確拒否可能性において条件の主効果が有意であった ($F(2, 240) = 7.00, p = .001$)。多重比較の結果、直接的要求使用者に対する明確拒否可能性は、間接的要求や丁寧な要求使用者に対するそれらよりも有意に高かった ($ps < .005$)。これらの結果は平川・森永 (2014) および平川 (2016) の先行研究と同様の傾向を示しており、各要求条件の操作が妥当であったことを確認した。

次に、各要求の受諾・明確拒否可能性および要求使用者への印象や認知とSPSとの相関係数を算出した (Table 2)。その結果、「低感覚閾」因子得点が

高い人ほど間接的要求の明確拒否可能性が高かった ($r = .22, p < .05$)。さらに、「低感覚閾」因子得点が高い人ほど間接的要求条件における要求使用者にネガティブな感情を抱いていた ($r = .24, p < .01$)。同様に、「低感覚閾」因子得点が高い人ほど丁寧な要求の受諾可能性が低く ($r = -.20, p < .05$)、明確拒否可能性が高かった ($r = .24, p < .01$)。併せて、「低感覚閾」因子得点が高い人ほど丁寧な要求条件における要求使用者にネガティブな感情を抱いていた ($r = .22, p < .05$)。間接的要求条件においては、「美的感受性」因子得点と要求使用者に対するポジティブな感情 ($r = .22, p < .05$)、印象 ($r = .19, p < .05$)、ならびに申し訳なさについての認知 ($r = .21, p < .05$) との間に正の有意な関連が認められた。

最後に、各要求の受諾・拒否可能性とSPSとの関係性に及ぼす要求使用者への感情や認知の媒介効果を検討するために媒介分析を実施した。その結

Table 2
要求使用者に対する感情、認知とSPSとの相関係数

	SPS	低感覚閾	易興奮性	美的感受性
直接的要求_ポジティブ感情	.01	-.05	.06	.06
間接的要求_ポジティブ感情	-.02	-.12	.02	.22 *
丁寧な要求_ポジティブ感情	-.08	-.14	-.02	.02
直接的要求_ネガティブ感情	.14	.11	.12	.12
間接的要求_ネガティブ感情	.16	.24 **	.10	-.09
丁寧な要求_ネガティブ感情	.20 *	.22 *	.13	.11
直接的要求_受諾可能性	-.05	-.04	-.01	-.12
間接的要求_受諾可能性	-.14	-.17	-.08	-.06
丁寧な要求_受諾可能性	-.16	-.20 *	-.07	-.10
直接的要求_明確拒否可能性	.08	.11	.06	-.05
間接的要求_明確拒否可能性	.14	.22 *	.05	-.02
丁寧な要求_明確拒否可能性	.12	.24 **	.02	-.08
直接的要求_印象	.04	-.03	.06	.15
間接的要求_印象	-.06	-.16	-.03	.19 *
丁寧な要求_印象	-.03	-.10	.03	.03
直接的要求_申し訳なさ認知	-.04	-.08	.04	-.11
間接的要求_申し訳なさ認知	.00	-.09	.02	.21 *
丁寧な要求_申し訳なさ認知	-.11	-.13	-.08	-.03

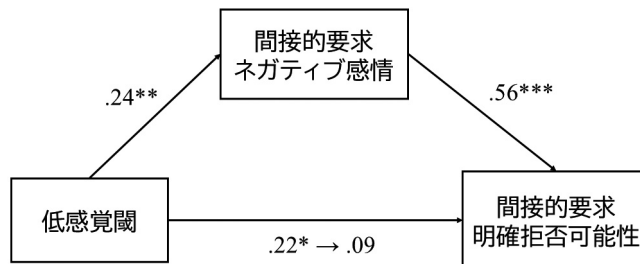
* $p < .05$, ** $p < .01$

果、間接的要求の明確拒否可能性を目的変数、「低感覚閾」因子得点を説明変数とした回帰分析において、「低感覚閾」因子得点が明確拒否可能性を有意に予測していた ($b = 0.32$, $SE = 0.13$, $\beta = .22$, $t(119) = 2.49$, $p = .014$)。また、間接的要求使用者に対するネガティブ感情を目的変数とした単回帰分析を実施した結果、「低感覚閾」因子得点はネガティブ感情も有意に予測していた ($b = 0.34$, $SE = 0.12$, $\beta = .24$, $t(119) = 2.73$, $p = .007$)。最後に、明確拒否可能性を目的変数、「低感覚閾」因子得点とネガティブ感情を説明変数とした重回帰分析を実施した。その結果、ネガティブ感情は明確拒否可能性を有意に予測し ($b = 0.58$, $SE = 0.08$, $\beta = .56$, $t(118) = 7.36$, $p < .001$)、一方で、「低感覚閾」因子得点の効果は非有意になった ($b = 0.12$, $SE = 0.11$, $\beta = .09$, $t(118) = 1.12$, $p = .267$)。間接効果を検証するために、標本数 2,000 によるブートストラップ法 (Preacher & Hayes,

2008) を用い、95%信頼区間 (以下、95%CI) を算出した。その結果、95%CI は 0 を含んでおらず ([.07, .36])、ネガティブ感情の完全媒介効果が認められた (Figure 1)。また、丁寧な要求の明確拒否可能性を目的変数、「低感覚閾」因子得点を説明変数とした回帰分析において、「低感覚閾」因子得点が明確拒否可能性を有意に予測していた ($b = 0.34$, $SE = 0.13$, $\beta = .24$, $t(119) = 2.66$, $p = .009$)。次いで、丁寧な要求使用者に対するネガティブ感情を目的変数とした単回帰分析を実施した結果、「低感覚閾」因子得点はネガティブ感情も有意に予測していた ($b = 0.31$, $SE = 0.13$, $\beta = .22$, $t(119) = 2.50$, $p = .014$)。最後に、明確拒否可能性を目的変数、「低感覚閾」因子得点とネガティブ感情を説明変数とした重回帰分析を実施した。その結果、ネガティブ感情は明確拒否可能性を有意に予測し ($b = 0.47$, $SE = 0.08$, $\beta = .47$, $t(118) = 5.59$, $p < .001$)、「低感覚閾」因子得点の効

Figure 1

間接的要求の明確拒否可能性と「低感覚閾」因子との関係性に及ぼすネガティブ感情の媒介効果

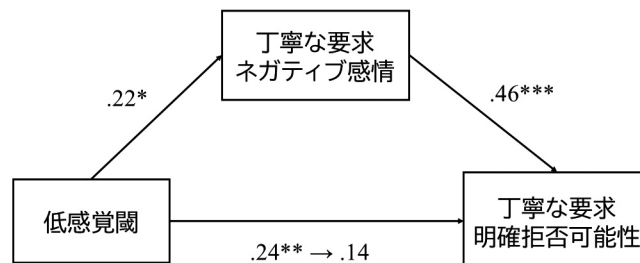


注) パス上の数値は標準化係数を示す。また、低感覚閾から明確拒否可能性への影響について、左側の数値は総合効果、右側の数値は直接効果を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 2

丁寧な要求の明確拒否可能性と「低感覚閾」因子との関係性に及ぼすネガティブ感情の媒介効果



注) パス上の数値は標準化係数を示す。また、低感覚閾から明確拒否可能性への影響について、左側の数値は総合効果、右側の数値は直接効果を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

果は非有意になった ($b = 0.20$, $SE = 0.12$, $\beta = .14$, $t(118) = 1.67$, $p = .101$)。ブートストラップ法による間接効果の検証の結果、95%CIは0を含んでおらず ($[-.04, .31]$)、ネガティブ感情の完全媒介効果が認められた (Figure 2)。

考 察

本研究は、要求に対する聞き手側の個人特性としてSPSに着目し、直接的要求、間接的要求、丁寧な要求の受諾・拒否可能性や要求使用者に対する感情、認知との関連を検討した。その結果、SPSの下位概念である「低感覚閾」因子の得点が高い人ほど、間接的要求の使用者に対してネガティブ感情を抱きやすく、明確に拒否する可能性が高いことが示された。媒介分析の結果、「低感覚閾」因子が明確拒否可能性に及ぼす影響は、要求使用者に対するネガティブ感情によって媒介されることが明らかとなった。

先行研究では、間接的要求の有用性について主に社会的要因から検討が行われ、間接的要求が最も効果的な要求方略でないことが報告されている (平川, 2016; 平川・森永, 2014)。本研究において、感覚刺激の閾値が低い人は、間接的要求の使用者に対して否定的な感情を抱きやすいことが明らかとなった。本研究の知見は、先行研究で得られた知見と整合的であるだけでなく、聞き手の個人特性が間接的要求の有用性に影響を及ぼすという新たな視座を提供するものである。間接的要求は、字義的な意味と本来の意図とに相違がある要求行為である。感覚刺激に敏感な者は、間接的要求に含まれる字義的な意味と意図の乖離や、利己的な動機を隠そうとする要求使用者の意図を鋭敏に察知し、違和感や不快感を抱きやすかった可能性がある。その結果、要求使用者に対するネガティブな感情が高まり、拒否傾向が強まったと考えられる。また、ポライトネス理論 (Brown & Levinson, 1987) によると、間接的要求の使用に

は聞き手の自律性の侵害の程度と埋め合わせの程度とのバランスが関与するとされる。本研究で用いられたシナリオでは、要求使用者であるAさんと聞き手である回答者が親しい友人関係であると想定されており、聞き手の自律性の侵害は比較的低い状況であったと考えられる。こうした場面で高い埋め合わせの伴う間接的要求の使用は、かえって聞き手の自律性の侵害につながり得る。感覚刺激の閾値が低い人ほど、自律性の侵害を感じやすかったために、ネガティブ感情や拒否反応が増大した可能性が考慮される。

さらに、本研究では「低感覚閾」因子得点が高い人ほど丁寧な要求の使用者にネガティブな感情を抱きやすく、明確拒否可能性が高いことも示された。先行研究では、丁寧な要求が最も効果的な要求方略であることが示されているが（平川, 2016; 平川・森永, 2014）、本研究では、感覚刺激の閾値が低い人に対してはその有用性が低下する可能性が示唆された。特に、友人関係のように自律性の侵害程度が低い状況では、埋め合わせの程度が高い丁寧な要求が過剰に映り、敏感な聞き手ほど自律性の侵害を感じやすかったために、ネガティブ感情や拒否反応が増大したと考えられる。

一方で、SPSの「美的感受性」因子得点の高さは、間接的要求の使用者に対するポジティブな感情や印象、負債感の認識と関連していた。この結果は、芸術に心を動かされやすい人は、間接的要求の表現や使用者の意図にも敏感に反応し、要求使用者に対してより肯定的な評価をしやすいことを表している。このことは、間接的要求の受け止め方や要求使用者に対する感情や認知に対して、SPSが単一の特性として一様に作用するのではなく、その下位概念ごとに異なる影響を及ぼすことを示唆している。今後は、SPSの複合的な概念だけでなく、その下位概念にも着目しながら、それらが対人行動や他者認知にどのような影響を及ぼすのかを詳細に検討することでSPSの包括的な理解につながるとと思われる。

加えて、本研究では、要求の受容・拒否が単なる認知的判断ではなく、要求使用者に対する感情を媒介して形成されることを実証的に明らかにした。聞き手の個人特性が情動反応を通じて行動選択の可能性に影響するという一連の過程を明らかにした点は、対人コミュニケーション研究に新たな視座を提供する。

最後に本研究の課題と今後の展望について議論する。第一に、本研究は架空シナリオを用いた研究で

あったため、実際の対人場面における行動を直接測定していない。今後は実験の手法や行動観察を導入し、要求の受諾・拒否の過程をより生態学的に検討する必要がある。第二の課題として、使用したシナリオが限定的であった点が挙げられる。本研究では友人が引っ越しを依頼する場面を扱ったが、ポライトネス理論では、社会的距離や地位差、要求の負担度が自律性侵害の認知に影響するとされる（Brown & Levinson, 1987）。また、平川・森永（2013）は、反発可能性が高い場面や要求負担が大きい状況で間接的要求の使用が増えることを示している。将来の研究では、親密度や負担度が異なる複数の場面を設定し、要求の受諾・拒否とSPSとの関連を比較検討することが求められる。第三に、本研究は聞き手のSPSに焦点を当てたが、要求に対する反応には対人不安や共感性といった他の心理特性も関与している可能性がある。これらを併せて検討することで、要求の受諾・拒否に及ぼす要因の影響についてより包括的な理解が得られると考えられる。さらに、SPSは聞き手の反応だけでなく、話し手の要求方略選択にも影響を及ぼす可能性がある。SPSの高い人は、要求を行う際に直接性や間接性の度合いを選択的に調整する傾向があると推測される。今後は、聞き手と話し手の双方のSPSに着目した検討を実施することで双方向的なコミュニケーションモデルの構築が期待される。

本研究は、聞き手のSPSという個人特性が間接的要求や丁寧な要求の受容・拒否に影響を及ぼすことを示し、その過程に聞き手の情動反応が関与することを明らかにした。これらの知見は、間接的要求の理解を深化させるだけでなく、対人コミュニケーションにおける個人差の重要性を示唆するものである。今後は、自律性侵害の程度を操作した実験的検討や、他の心理特性を組み込んだ研究を通じて、私たちの要求表現や対人コミュニケーションのより精緻な理解が期待される。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

関連する発表

本研究結果の一部は、日本パーソナリティ心理学会第34回大会で発表された。

引用文献

- Acevedo, B. P., Aron, E. N., Aron, A., Sangster, M.-D., Collins, N., & Brown, L. L. (2014). The highly sensitive brain: An fMRI study of sensory processing sensitivity and response to others' emotions. *Brain and Behavior*, 4, 580-594. <https://doi.org/10.1002/brb3.242>
- Aron, E. N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. (2012). Sensory processing sensitivity: A review in the light of the evolution of biological responsivity. *Personality and Social Psychology Review*, 16, 262-282. <https://doi.org/10.1177/1088868311434213>
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universal in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- 平川 真 (2016). 社会的距離が間接的要求の使用効果に及ぼす影響 対人コミュニケーション研究, 4, 35-46. http://purl.org/coar/resource_type/c_6501
- 平川 真・深田 博己・塚脇涼太・樋口匡貴 (2012). 自己-他者配慮の目的が間接的要求の使用に及ぼす影響 心理学研究, 82, 532-539. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.82.532>
- 平川 真・森永 康子 (2013). 間接的要求の使用に及ぼす状況要因の影響 対人コミュニケーション研究, 1, 39-53.
- 平川 真・森永 康子 (2014). 間接的要求の使用によって使用者の目標は達成できるか 対人コミュニケーション研究, 2, 35-46. http://purl.org/coar/resource_type/c_6501
- 飯村 周平 (2016). 中学生用感覚感受性尺度 (SSSI) 作成の試み パーソナリティ研究, 25, 154-157. <https://doi.org/10.2132/personality.25.154>
- 飯村 周平 (2022). HSP の心理学: 科学的根拠から理解する「繊細さ」と「生きづらさ」金子書房
- Jagiellowicz, J., Xu, X., Aron, A., Aron, E. N., Cao, G., Feng, T., & Weng, X. (2011). The trait of sensory processing sensitivity and neural responses to changes in visual scenes. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 6, 38-47. <https://doi.org/10.1093/scan/nsq001>
- 岐部 智恵子・平野 真理 (2020). 日本語版児童期用敏感性尺度 (HSCS-C) の作成 パーソナリティ研究, 29, 8-10. <https://doi.org/10.2132/personality.29.1.3>
- 串崎 真志 (2018). 高い感性をもつ子ども (Highly Sensitive Child) の理解 関西大学人権問題研究室紀要, 76, 27-55.
- 小塩 真司 (2024). 環境感受性とパーソナリティ特性 飯村 周平 (編) HSP研究への招待: 発達、性格、臨床心理学の領域 (pp.78-92) 花伝社
- Preacher, K. J., & Hayes, A. F. (2008). Asymptotic and resampling strategies for assessing and comparing indirect effects in multiple mediator models. *Behavior Research Methods*, 40, 879-891. <https://doi.org/10.3758/BRM.40.3.879>
- Seale, J. R. (1975). Indirect speech act. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics. Vol. 3. Speech acts*. New York: Academic Press. pp. 59-82.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成 —自己指向・他者指向の弁別—に焦点をあてて— 教育心理学研究, 56, 487-497. https://doi.org/10.5926/jjep1953.56.4_487
- 高橋 亜紀 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成 感情心理学研究, 23, 68-77. https://doi.org/10.4092/jsre.23.2_68
- Zhang, X., Widaman, K., & Belsky, J. (2023). Beyond orchids and dandelions: Susceptibility to environmental influences is not bimodal. *Development and Psychopathology*, 35, 191-203. <https://doi.org/10.1017/S0954579421000821>.

脚 注

1. Aron & Aron, (1997) は、全人口の15から20%程度がSPSの高い人に該当すると報告している。その一方で、近年では、SPSを「高い」「低い」といった質的に扱うのではなく、その高低がグラデーションのように連続的に分布している特性として扱っている研究もある (小塩, 2024; Zhang et al., 2023)。飯村 (2022) によると、SPSの測定には「何点以上が高SPS群である」といった絶対的な基準がないことから、SPSを連続的に扱うことの妥当性を説いている。そのため本研究でも、SPSを連続的な特性として扱うこととする。
2. 本研究で用いたシナリオ内容を以下に示す。
あなたとAさんは、同じ学年で同じ学部、学科

に所属しており、よく一緒に遊んだりする親しい友達です。現在Aさんは、一人暮らしをしており、来週の日曜日に引っ越しをする予定です。運ぶ荷物はやや多く、1人で作業をすると大変です。そこでAさんは、あなたに引っ越しを手伝ってもらおうと思いました。Aさんは、あなたとひととおり会話した後、以下のように言いました。